四谷の
千枚田だより
第236号

千枚田を守り抜いた偉大な先人たちへの感謝の灯

お田植感謝の夕べ

みんなで灯そう千枚田

開催日時　令和５年６月３日(土)午後７時から

鞍掛山麓千枚田保存会

共　催：各種団体・地域住民の皆さん

協　力：愛知県ふるさと指導員

お知らせ

五月二十七日(土)、午前八時から景観・環境整備を行います。

お田植感謝の夕べ
～みんなで灯そう千枚田～
開催のお知らせ

平成十八年から開催されたお田植感謝の夕へも令和二年(十五回目)からコロナ感染症対策ため中止を余儀なくされた。

長く続いたコロナ禍も五月二十五日をもって全都道府県において緊急事態宣言は解除された。

これを機に、大勢の皆さんの協力を頂けるものと信じ、開催に踏み切った。この催しは「昔の農休み」と捉え、作業道(景観道)に千五百本のロウソクを灯し、日々、厳しい棚田の保全管理に費やす耕作者を労うと共に、地域の宝「四谷の千枚田」を連谷地域住民が一体となり、保存継承を忌憚なく語る(呑み、喰いは無論)場となれば幸いか思うし望む。

急傾斜地の沿道に灯るともしびが幻想・幽玄の世界を醸し出し、来る人々の束の間の癒しの場となり、評判が評判を呼び、大きな催しとなってしまった。

催しには元手がかかる。会場では有害獣(イノシシ)の有効活用としたシシ汁や、若い頃は、惹けを取らなかったと自負する「棚田っ娘」の千枚田五平餅など、思い思いのバザーを展開。会場には来年の開催を占う協力金箱なども設置する。

また、天空を彩る打ち上げ花火(十五発)も好評で、現在予約中であるが、数は少なくなっている。

くどいようであるが、催しには元手がかかる。夕闇の天空に龍が登る様を見て、感動・感激したら協力金箱に心尽くしを惜しみなく戴ければ、また、来年開催の目処が立つ。

代掻き&田植え

鳳来寺小学校五年生(十一人)は校外学習の一環として「四谷の千枚田」で稲作体験に取組んでいる。

五月一日、スクールバスで代掻きにやってきた。田んぼは一月に先輩からの引継ぎ時に耕起してあり、ドロドロに代掻きを行えばよい。

児童達から「お願いします」の挨拶に、お米の大切さ、尊さを一年間の稲作体験から、肌で感じて頂きたい。等々の挨拶もそっちのけで、いたづらっぽい瞳が何か目論んでいることが、見え見えであった。

いざ、田んぼに入り代掻きを開始と同時にわぁ～わぁ～わぁ～ きゃあきゃあ～とやかましい(騒がしい)。あまり騒ぐと「仏法僧」が鳴かんくなる…等々、制してもお構いなしに、田んぼで相撲をとったり、泥のぶっけあいの大騒ぎだ。あっという間に三枚の田んぼの代掻きは終わった。その時、沢の向こうの田んぼでナゴヤダルマガエルの集団産卵が始まった。貴重な瞬間であったので子ども達を寄せ集め、その瞬間を見学させ、皆が大声を出したり騒いだりしたのが産卵期のカエルたちの刺激になり産卵が始まってしまった。

ついでに、カエルの産卵について、例えばヤマアカガエルは春の一番初めの雨の日を刺激に産卵開始、シュレーゲルアオガエルは耕運機による代掻きが刺激になり産卵。等々自然界の仕組みを説いた。

この、ナゴヤダルマガエルは十年前には見かけなかったが、最近、急激に増え、一昨年頃から田んぼに植えたばかりの苗が産卵のため荒けられたり、苗が浮いたりする被害が頻発して困っている。

児童たちのいたづらっぽい「目論見」がカエルの産卵影響まで波及するとは、思いもよらぬ知見を習得した。

五月八日、一日に代掻きを行った田んぼにミネアサヒの田植えを行った。

児童たちに苗を持ち、三本づつ植えるように指示、真剣に田植えを行った。点数は百三十点満点の九十点と評価、大喜びであった。

JAこども農学校の田植え

JA愛知東が主催する「こども農学校の田植え体験が六日、四谷の千枚田で行われ、裸足の子供らが小雨の降る中、雨具をつけてミネアサヒの苗を植えた。

参加した子どもらは、雨も気にせず、田んぼの泥に足を取られながらも、丁寧に苗を植えていった。

田植えは一時間ほどで終わり、六枚の棚田約五㌃に稲の苗がきれいに並んだ。

こども農学校はJA愛知東管内の小学三年生から六年生を対象とした学校通年型(年十回)農業体験イベント。十九年目を迎えた今年度の農学校には小学校十四校から七十三人の児童が参加し、四月十六日に開校式が行われた。子供たちはこれから十二月まで米や野菜の作付けなど、農業体験を学ぶ。

豊橋調理製菓専門学校の田植え

同校は、「食の原点を知る」をテーマに平成十八年から四谷の千枚田で米つくりを実践。自ら育てた米一粒の大切さを体感するため、田植え、田の草取り、稲刈り、脱穀と年に四回学習する。

五月十一日、学生たちは「ふれあい広場」から眼下に見下ろす千枚の水鏡に感嘆。そこで、愛知県新城設楽農林水産事務所建設課小松本課長から施設整備、ふるさと指導員を通した各種支援等の挨拶。新城市鳳来総合支所地域課長坂課長から「つなぐ棚田遺産」選定などをアピール。学生たちは、高低差二百㍍を一気に下り、田んぼに辿り着いた。

田植えを行う前に学生たちに稲の苗を二本から三本を基準に植えると、分けつして一株が二十二～三本になる。一本の稲穂が百粒なら、一株に二千二百粒で、ごはん茶碗一杯分になることや植える間隔と生育状態等々の説明を行い田植えを開始した。植え終わった状態をみても、手直しもいらないくらい丁寧に植えられていた。…満足…

発　行　令和五年五月十五日
鞍掛山麓千枚田保存会
文　責　小山舜二